シリーズ・高専における英語教育のいま⑧

「中」と「外」から見た高専英語教育

北海道工業大学　准教授　工藤　雅之

札幌市立高等専門学校

筆者は、平成十一年から十六年までの五年間、すでに閉校した札幌市立高等専門学校（札幌市立高専）に勤務していました。札幌市立高専は、インダストリアルデザイン学科を専攻とした日本で唯一の単科高専でした。今年三月に惜しまれつつ一三年の短い歴史にピリオドを打ちましたが、その功績は卒業生の活躍に表れています。卒業生の中には、デザインに全く関わらない者もいると聞きますが、多くはメーカーや各デザイン工房のデザイナー、プランナー、建築士、自治体の建設部勤務や、造形アーティスト、イラストレーターなどとして活躍していますし、高等教育機関で教鞭を執っている者も数名います。

近年、卒業生の近況を聞いて驚かされるのは、留学だけでなく、会社の派遣で海外に赴任する者や海外に拠点を移してデザイン活動をする者が多いことです。また、将来的に海外で活動しようと計画している卒業生の情報も多く、卒業生の間では、国境を越えてデザイン活動に従事するというスキームが徐々に形成されつつあるようです。「将来デザイナーになるのなら絶対に英語は必要だよ」と意識を喚起させてきた効果と思いを巡らすこともでき、教員としては少しむずかゆい気分です。海外に行かなくても職務上英語を使う機会の多い卒業生も多いと聞くので、われわれが施した英語教育の効果が気になるところです。われわれが教えた英語は日本を含めた世界で、どれくらい役立っているのでしょうか？　彼らに直接聞きたいような聞きたくないような微妙な気分です。

高専英語教育の2つのジレンマ

高専の英語教育とその効果を論じる時には、一貫教育と早期専門教育という高専教育の根本に連動するジレンマがつきまといます。五年間の一貫教育は専門教科の修得を念頭に置いているので、英語学習に与えられる時間が、高等学校の普通科に比べて少ないのです。一年生から専門教育に時間を割くため、細分化された各種英語科目の時間を確保できず、多くの場合、高等学校普通科の三分の二に満たない時間数でカリキュラムが編成されます。従って、検定教科書の使用などに際して多くの制約を受けない、高等教育機関ならではの自由な発想に基づく講義内容を享受できないばかりか、英語技能の発達に必要な演習時間も確保できないという声を多く聞きます。最近の研究結果から、第二言語習得は、他の認知技能と同様に技能を養成することにほかならず、技能発達ためには、相応の時間を要することが判明してきており、実施授業時間の少なさは学習効果に負の影響があると言えます。

もう一つは、高専では英語が必ずしも最重要課題でないことです。学生は、自らが志向する高度な専門教育を受けるために入学したのであり、専門分野と関連がうすいと判断すると学習意欲に問題が生じることが指摘されています。また、後期中等教育と高等教育が繋がっていることから、受験にともなう英語

の試験が無いので、英語学習に対する意欲が低いのだとも言われます。そのため私の高専での英語教育は、工夫を凝らしながら学習意欲を高めることに注力していました。高専の潤沢な機器設備状況やeラーニングの急速な普及は、高専生という学習者をよく理解し、言語学習へのモチベーションを高めようという施策の証左であると言えます。

高専と大学の学習者の違い

大学に籍を移して以来、英語学習に対する意欲向上のほかに頻繁に考えることは、学習者それぞれの特性です。なぜならば、大学で受け持つ学習者たちは高専に比べて、年齢や学習に対する動機付けだけでなく、個々に多様な特性を持つからで、加えてこれらの学習者特性は学習効果と強い関連性があるのではないかと思うようになったからです。学習者特性と学習効果の関係は、多くの知見が集積され研究が進んでいますが、いまだ充分な整理がなされていない分野もあります。学習意欲に関連すると思われる学習者特性は、おおまかに「過去の学習履歴（学習レベル）」、「学習に対する態度や意欲」、そして学習内容の「将来での必要性」（ここでは学習者の将来的な英語使用に対する意識を指す）などに分類できます。高専の英語教育でも習熟度別や少人数クラスの導入、学習モチベーションを向上するための教授法の導入など学習者特性に合わせた取り組みがなされていますが、「将来での必要性」についてはどうでしょう。特にこの学習者特性に関しては、学習意欲と強い関連があると思われ、学習態度に深い影響を及ぼすと考えられます。また、学習意欲があれば学習効果も高くなりやすいという関係が想定できます。

高専生は、学習レベルなどにおいて均一な集団であると思われがちですが、本稿の冒頭で述べたように高専卒業生の進路は実に幅広く、卒業生の進路を基に考察すると英語を必要とする程度は、すべての学生にとって同レベルではないように思えます。少なくとも「将来での必要性」に関しては相当なばらつきがあると言えるでしょう。英語の必要性が多岐にわたるのならば、高専の英語教育はそれらのニーズに対して柔軟に対応できているのでしょうか？　もちろん、英語はできるに越したことはありませんが、高専生たちは等しく高い英語能力を養う必要があるのでしょうか。自らの将来設計に応じて、違った学習目標が設定されてもよいのではないでしょうか？

フレキシブルな学習

筆者は、近年のPISA学力テストで上位を占めたフィンランドで研修する機会を得て、フィンランドの教育の最大の特徴はその柔軟性にあると学びました。なかでも私が注目したのは、個人の学びに対してもできるだけ柔軟に対応しようという取り組みです。学習者がどの場面でどのような決断をしても柔軟にフォローしようとする意識がフィンランドの教育全体には通底されています。

中学校を卒業した生徒に高等教育機関で五年間の一貫教育を施すのは、高専だけです。このことはフレキシブルな教育手法を取り入れられるので、好意的に捉えられています。多くの問題を抱えるわが国の中等教育システムにおける知識詰め込み主義に相対するオルタナティブ・アプローチとしても、私は高専教育が持つフレキシビリティは極めて重要な所産であると信じています。例えば、実施時間の少なさは現在の実践的なクラスをさらに「技術発達の練習」に時間を充てて技術習得に努めるなど、さまざまな柔軟な工夫を以て解決できると思います。近年の研究で注目を浴びている、英語学習を認知スキルの発達と捉える観点からも、後期中等教育と高等教育を直線的に結んで実践的な技能中心の英語教育を施すことは高専教育の特権だと思うのです。

今までの高専の英語教育に学習者特性の視点を加えることで、高専の英語教育は学生本位のより自由度の高い教育システムを提供し、学習意欲を高めることができるのではないでしょうか。高専では学習指導要領に左右されない、実験的な講義内容の設定も可能であることから、学習者の特性を汲み上げ、学習者にあった柔軟な個別の目標を設定することで、先に挙げたジレンマはある程度解決できると信じています。学習者特性を考慮し、それぞれの目標や将来での必要性に応じた多様性のある教育目標を掲げる英語教育が実現し、日本の英語教育をリードする存在になるよう高専の英語教育には期待しています。